

猫の閉塞性肥大型心筋症における僧帽弁収縮期前方運動の発生機序についての考察

○大池三千男¹⁾ 犬飼久生²⁾

1) おおいけ動物病院・帯広 2) 猫の病院・北見

【はじめに】猫の肥大型心筋症（HCM）のうち、動的左室流出路閉塞（LVOTO）を呈しているものを閉塞性肥大型心筋症（HOCM）と言う。HOCMはしばしば、僧帽弁収縮期前方運動（SAM）を併発している。また通常 SAMには僧帽弁逆流（MR）が伴う。HOCM+SAM+MRの病態である。今回我々は、若齢のスコティッシュホールド2例をHOCMと診断した。検査結果を精査する事で、HOCMがSAMを併発していく機序を考察したので報告する。

【症例1】スコティッシュ・ホールド、雄、6カ月齢、体重3.04kg、心拍数180bpm、Levine1/6、心エコー検査では、左室自由壁厚5.8mm、中隔壁厚6.9mmでHCMと診断した。臨床症状がない為、経過観察とした。約1年後の検査では、心拍数192bpm、Levine2/6に増大しており、ベナゼプリル1.25mgBIDで治療開始した。約2年後の心エコー検査では、弁下左室流出路における乱流が認められ、LVOTOをおこしており、HOCMと診断した。肥厚した心室中隔は収縮期に左室流出路内に突出し、腱索と接触していた。症状の進行が診られた為、アテノロール6.25mgBIDを追加した。

【症例2】スコティッシュ・ホールド、5カ月齢、体重3.72kg、心拍数240bpm、Levine2/6、心エコー検査では、左室自由壁厚6mm、中隔壁厚5.8mm、乳頭筋の肥大が認められた。弁下左室流出路における乱流が認められ、LVOTOをおこしており、HOCMと診断した。肥厚した心室中隔は収縮期に左室流出路内に突出し、腱索と接触していた。また、検索断裂の所見が診られ、軽度のSAMが始まっていた。ベナゼプリル1.25mgBIDで治療開始した。

【考察】今回の2症例から、HOCMがSAMを併発していく機序は、以下の様に考えられた。HOCMでは、収縮末期に突出した中隔壁が弁尖や腱索と1度目の接触をする。直後の拡張初期に僧帽弁が開口し、弁尖や腱索が中隔壁と2度目の接触をする。これらの物理的な接触により腱索断裂が生じ、SAMが発症、進行し、MRを併発していくと考えられた。現在、無症状のHCMやHOCMの治療には賛否両論がある。逆に、HOCM+SAM+MRまで進行した症例の予後は悪い。本発表の臨床的意義は、HOCMを早期に発見し、中隔壁との接触による腱索断裂が懸念される症例は、早期から治療を開始し、検索断裂を予防する事が、SAMの発症を遅らせ、長期生存に繋がるものと思われた。

□□□□□□□□□□□□□□□□・・・本文<9ポイント、明朝体>